

# 「身近な地域の歴史」の教材化の可能性

## —中世井ヶ谷窯の生産と衰退—

杉浦茂（愛知教育大学非常勤講師）

### Possibility of Teaching Materials Making of "History in a Close Area"

Shigeru SUGIURA

#### 1. はじめに

平成 29 年度版『中学校学習指導要領』では、中学校社会科「歴史的分野」の内容に大項目「A 歴史との対話」が新たに位置付けられている。この大項目については、「歴史的分野の学習の導入として」、歴史的分野の学習に必要とされる基本的な「知識・技能」を身に付け、自身の視点から歴史に問いかける学習を通して、主体的に調べ分かれようとして課題を意欲的に追究する態度を養うことをねらいとしている<sup>(1)</sup>。

そして中項目として掲げられている「(2) 身近な地域の歴史」に関しては「課題を追究したり解決したりする活動」により、「ア 知識・技能」や「イ 思考力・判断力・表現力等」を身に付ける指導が示されている。とりわけ「イ」に関しては、「地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現すること」が指導の内容として掲げられている。

そこでキーとなる「身近な地域」という概念であるが、『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 社会編』によれば、身近な地域とは、「生徒の居住地や学校の所在地域を中心に、生徒自身による調べる活動が可能な、生徒にとって身近に感じることができる範囲」であり、身近な地域は、「歴史上の出来事を具体的な事物や情報を通して理解することができる」とともに、それを自らが生活する日常の空間的な広がりの中で実感的に捉えることができる学習の場」と解説している。このような「身近な地域の歴史」学習を中学校社会科歴史的分野における生徒の学びの導入として位置付け、「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を育てる意図は重要である。

しかし、かつて国立歴史民俗博物館教授であった塚本学がその著『小さな歴史と大きな歴史』の中で、「身近な場面から歴史を考えていきたい」と述べたように、「身近な小さな場面での歴史のなかに大きな世界の歴史をみていく」視点<sup>(2)</sup>を歴史研究者のみならず歴史教育者も持つ必要があることを忘れてはならない。それは、地方の歴史から中央の歴史を見つめる視点だけでない、地方の小さな歴史から歴史の普遍性を導き出す試みである。

その意味において、「身近な地域の歴史」学習は、歴史学習の導入としての位置付けだけでなく、平成 29 年度版『中学校学習指導要領』が示す内容「B 近世までの日本とアジア」「C 近現代の日本と世界」の学習においても位置付けることができると考えている<sup>(3)</sup>。

#### 2. 焼き物の歴史を教材に

##### (1) 中学校版社会科学習副読本の今

令和元年度現在、多くの市町村教育委員会の作成による中学校版社会科学習副読本が、その管下の中学生の学習に供されている。愛知県内においても、例えば名古屋市教育委員会により『知っておきたい 15 の史実 ナゴヤ歴史探検』が作成されている。これは市内全中学生に配布されるだけでなく、一般書店を通じて市民に販売もなされている社会科学習副読

本である<sup>(4)</sup>。本書は、タイトルに「知っておきたい15の史実」とある通り、通史的記述ではなく原始から近・現代の歴史を15のテーマに絞り、テーマごとの歴史が記述されている。その中に「3 古墳時代～鎌倉時代 焼き物作りに最適だった東山」のテーマがあり、東山地区で5世紀に須恵器生産が始まったわけやその後の展開、須恵器や灰釉陶器、山茶碗生産などの歴史が、考古学による最新の研究成果に基づいて3ページにわたり記述されている。さらに4ページ目には関連する資料館・博物館や窯跡が紹介され、生徒の見学のための資料となっている。オールカラーによる専門的な解説と豊富なイラストや写真、図表による編集は、これまでにない斬新な仕上がりとなっている。5世紀から現代にわたり列島を代表する窯業生産地である愛知県の窯業生産のルーツは東山地区にあるという自負からの編集であるが、焼き物を学習のテーマに掲げてあることの意義は大きい。

また、本稿が対象とする井ヶ谷古窯群が営まれた愛知県刈谷市においても平成30年度に、『わたしたちの郷土 ～刈谷歴史伝～』と題した中学生社会科学習副読本が刈谷市教育委員会によって編集された。名古屋市の副読本同様にテーマ別編集がなされ、遺跡や人物など30のテーマごとの記述がなされている。その中に「全国有数の焼き物生産の拠点 ～井ヶ谷古窯群～」と題して写真や図版を使い、3ページにわたり井ヶ谷古窯群の歴史と焼成された焼き物についての解説がなされている。井ヶ谷地区の丘陵地に古代・中世を通じ、断続的に窯業生産が行われたことの意味をとらえさせることのできる好資料となっている。

## (2) なぜ焼き物なのか

私たちの祖先は、碗や皿などの食膳具、播り鉢などの調理具、鍋や釜などの煮炊具、壺や甕などの貯蔵具等、縄文時代の昔から器を進化・発展をさせながら使用してきた。その原材料は、土や木、石、鉄などの金属等であるが、とりわけ5世紀に朝鮮半島から伝わった硬質な須恵器という焼き物を手にすることで様々な器種を生み出すことに成功した。そして安価で丈夫なプラスチック材を始めとして、多様な材質による多様な器が誕生した現代は、器を使う生活史の上でも大きな転換点を迎えている。

このような生活に直結した器の歴史、とりわけ身近な焼き物の歴史は、具体的な史料に恵まれず従来なかなか教材として取り上げることができなかった。ところが、近年の埋蔵文化財の発掘調査の進展によって、出土した陶磁器が歴史資料として語られ、「考古学陶磁器」として位置付けられるようになってきた。「考古学陶磁器」をもって生活文化史の教材構築をめざす所以である。地域の焼き物の歴史を学ぶことで、そこに暮らした人々の生活の様子だけでなく、生産や流通の問題等と相まって様々な歴史像を結ぶ、いわば地域の窯業史から歴史の進展をみつめる授業の創造を唱えたい。

## 3. 猿投窯の概要

### (1) 猿投窯(猿投山西南麓古窯跡群)とは

猿投窯は、猿投山の西南方向の丘陵地帯約20km四方に展開した5世紀から14世紀までの古代・中世にわたる窯跡群の総称であり、名古屋市東部から瀬戸市南部、長久手市、日進市、東郷町、西三河西部などにかけて展開している。正式名称は、「猿投山西南麓古窯跡群」であり、現在古代の窯跡約630基、中世の窯跡約450基が確認されている(図1)。

そもそも本窯跡群は、1954(昭和29)年本多静雄が現みよし市黒笹地区で陶片採集調査を行ったことによって発見された。

その後、1955(昭和 30)年からの愛知用水建設工事に伴って名古屋大学考古学研究室による発掘調査が行われ、その全貌が明らかとなった窯跡群である。人々の記憶から忘れ去られていた大窯業地帯がその眠りから目覚めたのである。

猿投窯の始まりは、5世紀前半に朝鮮半島からの渡来人によって伝来した須恵器を焼成する目的で窯が築かれたことによる。須恵器生産の列島での始まりは現大阪府南部の陶邑窯とされているが、猿投窯は陶邑窯開窯から時を置かず、名古屋市東山地区で



図1 猿投窯の地区区分と周辺の古窯

(加藤安信編『遺跡からのメッセージ』中日新聞社) いる。窯は窖窯<sup>(5)</sup>と呼ばれ、丘陵の斜面に窯を築くことで、燃料である薪の炎を登らせるタイプの窯である。

## (2) 猿投窯の歴史<sup>(6)</sup>

①古墳時代：古墳時代中期5世紀に焼成が始まった猿投窯であるが、当初焼成された器種は杯、杯蓋、高杯、器台、壺などであり、古墳などへの供献のための器であった。東山地区は断夫山古墳の被葬者とも言われる尾張氏の勢力下にあり、その経営主体は尾張氏であったことが考えられている。

②律令様式への転換：7世紀末に至り、律令国家の成立とともに猿投窯の焼成品が国家への貢納物として位置付けられることによって、須恵器生産の転換期を迎えた。一地方窯から国家的な窯、すなわち官窯的窯として生産を始めることとなったのである。器種も企画に基づいた杯や盤などの供膳具、壺や甕などの貯蔵具、水瓶や浄瓶、多口瓶などの仏具などが焼成された。

③生産地域の拡大：東山地区からスタートした生産地域も拡大を見せ、名古屋市近隣の日進市、長久手市、東郷町、みよし市、豊田市西部、豊明市、刈谷市北部(井ヶ谷地区)、大府市北部などへと広がっていった。考古学上では、これらの地域を東山地区(H)、岩崎地区(I)、折戸地区(O)、黒笹地区(K)、鳴海地区(N)、井ヶ谷地区(IG)の6地区に分類している<sup>(7)</sup>。

④施釉陶器生産へ：9世紀に至り猿投窯では、当時列島唯一の施釉陶器である灰釉陶器が焼成された。高火度焼成で植物灰を釉薬とする国産初の陶器の誕生であった。さらには酸化鉛を発色剤にした緑釉陶器も限定生産することに成功する。陰刻花文が施された緑釉の碗や皿の優美さは今でも見る者の心を捉えるものがある。これらの開発の背景には、国家の中国製陶磁器や金属器などへのあこがれがあったものと考えられている。国産高級陶器づくりをめざす、いわば国家プロジェクトの舞台となったのである。

⑤生活雑器生産へ：高級陶器である灰釉陶器づくりを進めた猿投窯であったが、平安時代末の11世紀以降には灰釉を施すことをやめ、碗と小碗、小皿、鉢などに集約した無釉の陶器生産へと転換をしていった。中世猿投窯の誕生である。無釉の灰釉系陶器は、一般に「山

茶碗」と呼ばれている。これは山に行けば拾える茶碗の意味からきており、大量に生産されたことにより、焼成に失敗した廃棄品を丘陵地に捨てた結果である。

この粗雑で大量に焼成された山茶碗は、一般集落にも大量に流通し中世集落遺跡からは必ず出土する食器である。しかし、その流通範囲は愛知県、岐阜県、三重県、静岡県が中心であり、東海地方限定の焼き物であった。13世紀前半に生産の最盛期を迎え、それ以後急速に衰退していき14世紀には消滅する道を辿った。

以上、およそ千年にわたる猿投窯の歴史を簡潔にまとめてみたが、古墳時代中期の5世紀に始まった須恵器窯から古代には国家的な窯に、そして中世への転換期には再び地方窯へと変遷していったことがわかる。

### (3) 猿投窯転換の背景

前項で見たように猿投窯は、3つの時期を経る中で2度の大きな転換期を経験している。

I期：5世紀古墳時代中期から7世紀末律令国家成立時までの地方窯の時期

II期：7世紀末から11世紀までの灰釉陶器窯としての国家的な窯の時期

III期：11世紀から14世紀までの山茶碗生産を中心にした地方窯の時期

大阪の陶邑窯や九州の牛頸窯などの大窯業地が9・10世紀に衰退する中で、なぜ猿投窯が国家的窯として生産を続けていったのか歴史教材としても魅力的であるが、本稿ではII期からIII期への転換点とその終焉に焦点を当てていく<sup>(8)</sup>。

### (4) 猿投窯以後

14世紀に猿投窯が終焉することで、中世後半以降の当地方では窯の火が途絶えたかといえそうではない。12世紀前葉には知多半島の丘陵地、12世紀後葉には猿投窯と接する瀬戸の地に山茶碗窯が築かれていく。それぞれ中世常滑窯、瀬戸窯の始まりであるが、次第に前者は壺や甕の大型製品の生産に特化し、後者は高級施釉陶器「古瀬戸」の産地として列島に広く流通することになる。そしてその伝統が現代に繋がっていくのである。

すなわち千年にわたる猿投窯の工人の技術と伝統が、隣接する常滑と瀬戸へ伝播したことになる。実際に猿投窯の工人たちが移動したことが考えられているが、その理由についても細かな点は不明である。

## 3 中世井ヶ谷窯

### (1) 猿投窯井ヶ谷地区の歴史

猿投窯の南東部、現刈谷市と豊田市域にあたる境川と逢妻川に挟まれた地域に展開する井ヶ谷地区は、古代窯約45基、中世窯約20基が確認されている。その多くは愛知教育大学キャンパスや洲原池の周囲に所在している。当地区では以下の2時期に窯業生産がなされている。

I期(古代)：8世紀中頃から9世紀                      II期(中世)：12世紀中頃から13世紀

奈良時代末から須恵器窯として操業を始め、灰釉陶器を焼成していた平安時代前期にいったん操業を停止する。そして平安時代末に至り、山茶碗窯として再び操業を開始することに特徴がある。

### (2) 中世井ヶ谷窯の実際

①山茶碗について：11世紀後葉になり、東海地方の灰釉陶器生産はほぼ同時に停止され、無釉の陶器を作り始める。これがいわゆる「山茶碗」で、このほか小碗・小皿・片口鉢な

どの規格品が大量の山茶碗とともに生産されていった<sup>(9)</sup>。井ヶ谷窯で生産された山茶碗類は、古代から中世への転換期にあたる12世紀中頃から鎌倉時代前半の13世紀にかけて焼成された。

②山茶碗窯について：古代以来の須恵器窯は、熱効率を高めるためにさまざまな工夫を重ねて改良された。山茶碗窯に至り窯体も大型化し、全長が約10m、最大幅約2.5mといった規模のものも見られるようになる。10枚以上の碗を重ねて床面一面に置くことにより、一度に約5,000～8,000枚の山茶碗が焼成された。窯焚きの燃料であるマツやクヌギも数t規模必要であった。窯の耐用は、補修を繰り返すものの10回程度が限度と考えられている。発掘調査では、焼成中の窯の天井が崩壊し、

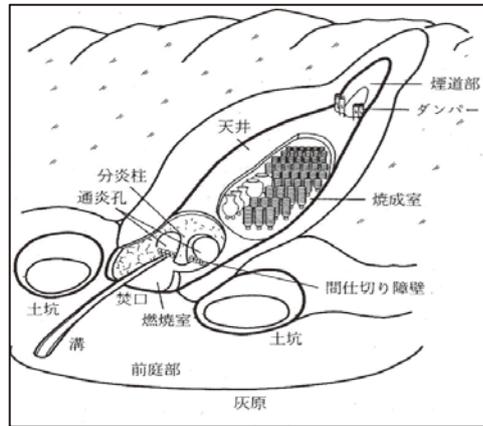


図2 窯体構造模式図

(『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』)

製品が中に詰まったままの窯跡に出会うこともある。また、一度の焼成で融着や割れなど全体の3割程度の損耗が推定されることから、より大量に焼く必要があった(図2)。

③流通について：山茶碗は、先述のとおり東海地方のみで流通した器であり、その交易範囲は限定的であった。常滑窯の大型製品である壺・甕や古瀬戸の施釉陶器が列島に広く流通したのとは対称的である。これは山茶碗が甕や施釉陶器のような希少価値を持たず、一般庶民の器として大量生産された安価な陶器であるため、遠方まで運搬する費用や搬出先の需要にも合致しなかったためと思われる。そのため猿投窯産山茶碗の流通は、西は伊勢地方南部、東は遠江東部までの範囲内に認められ、陸路での運搬については窯からおよそ30～40km程度の移動範囲が想定されている<sup>(10)</sup>。

井ヶ谷窯においては、窯群の西を南流する境川を利用し、船で運搬したことが推測されるものの、製品がどのような流通経路でどこに流通したか等、具体的な史料は全く残されておらず、考古学的な解明も十分になされていない。井ヶ谷地区は平安時代末に成立した領域型の荘園である重原荘内に所在したことから、荘内の「市」においても交易されたものと考えられる。その「市」は、重原荘の中心地と考えられている重原地区(現刈谷市重原本町、知立市上重原町)に置かれた可能性が高い。

④工人について：かつて山茶碗工人は農業生産を行いつつ、農閑期に窯の操業を行っていたという理解がなされていた。しかし現在ではそれは否定され、工人は窯業の専業従事者との考えが主流となっている。大量の薪の準備、窯の補修や整備、1tを超える陶土の調整、製品の成形、窯入れ、窯焚き、窯出し、運搬等、多くの作業工程が必要である。労働力として、1回の操業は、4人ほどの従事者で2～3か月の期間が必要との推定がなされ<sup>(11)</sup>、年間2回程度の操業がなされていたと考えられている<sup>(12)</sup>。合わせて井ヶ谷窯の山茶碗工人の系譜に関しては十分に解明されていないが、中世猿投窯他地区からの招聘による移動が考えられている。

#### 4. 中世井ヶ谷窯の教材化

##### (1) 中世井ヶ谷窯から何を学ぶか

歴史の学びの捉え方として、暗記する学習と捉えるいわば「暗記する歴史」に対し、子どもが歴史を解釈する学習と捉える「考える歴史」がある。子どもが「過去を解釈し、過去を描く」歴史学習、すなわち「解釈型歴史学習」<sup>(13)</sup>を進める際に重要なポイントは、なぜだろうと疑問に思う「問い」の存在である。以下、中世井ヶ谷窯を教材化する上で、生徒が疑問を抱くことが予想される点を掲げてみたい。

##### ア 生産について

- ・ 工人 だれが製作し、焼成したのか
- ・ 技術 焼き物技術はどうやって身に付けたのか
- ・ 立地 なぜ井ヶ谷の丘陵地に窯が築かれたのか
- ・ 陶土と燃料 どこからどのように手に入れたのか

##### イ 流通について

- ・ 重い製品の運搬はどのようにしたのか
- ・ 流通先と流通経路はどのようになっていたのか

##### ウ 生産体制について

- ・ 経営の主体 だれが工人に製作を命じたのか又は工人たちで経営していたのか

##### エ 生産の開始と終焉について

- ・ 開始 古代末から中世の始めにかけて山茶碗窯として井ヶ谷窯が復活したわけは
- ・ 終焉 なぜ14世紀に終わりを迎えたのか

##### (2) 井ヶ谷窯と重原荘

考古学研究の成果により、日本の古代から中世への転換期に窯業生産の在り方も大きな変化を遂げたことが明らかとなった。すなわち古代的な国家経営の窯から荘園公領制に基づく領主による経営の窯への転換であった。

中世井ヶ谷窯もこの歴史の流れと同じく、領主の経営する地方窯として復活を遂げたものと考えられる。その背景には、井ヶ谷地区を含む、重原荘の立荘が関わっているものと思われる。重原荘は、現刈谷市と知立市全域、豊田市南西部を荘域にした領域型荘園で平安時代末12世紀に成立したと考えられている。井ヶ谷窯との関係は、『刈谷市史』で「平安・鎌倉期における重原荘は窯業生産中心の荘園であり、主たる貢納物は窯業生産品であるという姿が想定」<sup>(14)</sup>されることを指摘している。これは重原荘内の河川の中下流域の沖積低地の水田化が室町時代以降に想定されることに基づいている。

また、窯の経営に関しても同書において、重原荘の荘官・地頭による直接的な管理下での生産を想定している。史料的に重原荘と井ヶ谷窯の関係を直接知ることはできないが、応永16(1409)年の「熊野檀那職譲状写」<sup>(15)</sup>はその一端を垣間見せてくれる。

「(前略) 三河国分

一所重原本郷内井加屋・にしさかい 一所八橋郷 (後略)」

これは熊野社参詣を案内する御師良尊が持つ檀那場のうち、尾張・三河国分を良実に譲渡した譲状で、当時の集落名の一部が記されている興味深い文書である。その内に「重原本郷内井加屋・にしさかい」とあり、ここから「井ヶ谷」と「西境」は重原本郷の一部と

認識されていたことがわかる。なぜ重原荘の中心地区と離れた井ヶ谷，西境が本郷内として位置付けられたのか。文書の記された年号から 14 世紀段階のこの地の人々の意識が窺い知れる。それは，荘官・地頭の管理下にある井ヶ谷窯としての生産面，境川に面した山茶碗等の集積地である流通面からきている可能性が高い。

### (3) 井ヶ谷窯の終焉と 15 世紀以降への展望

猿投窯全体の動向の中で生活雑器である山茶碗生産窯として，窯の復活を遂げた井ヶ谷窯であったが，14 世紀を境に操業を終え，ついには人々の記憶からも忘れ去られていった。なぜ操業を終えてしまうのか。史料的な裏付けはないものの，経済の発展に伴う商業活動の活発化や人々の嗜好の変化等，さまざまな要因が考えられている。常滑窯や瀬戸窯の隆盛と合わせてさまざま予想を生徒に考えさせたい。

やがて時代は多彩な釉薬を使った多様な焼き物が待つ戦国・織豊時代へと進んでいく。

### (4) 単元プラン

以上のような中世猿投窯における井ヶ谷窯の様相を踏まえ，以下のような学習単元を構想してみた（表 1）。

表 1 単元プラン「井ヶ谷にたくさんの窯があった！」—井ヶ谷窯から見える中世—

| 段階                                                | 課題                                                                                                                                                                         | 知識・技能                                                                                                                                                   | 思考・判断・表現                                                                                                          |
|---------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| つかむ段階<br>井ヶ谷窯出土の古代・中世の陶器に触れる<br>(須恵器や灰釉陶器，山茶碗や小皿) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・だれが作ったのか</li> <li>・どうして井ヶ谷の丘陵地に窯が築かれたのか</li> <li>・原料の粘土や燃料の薪はどこから？</li> <li>・窯を築いたり，焼いたりする技術はどこで？</li> </ul>                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・井ヶ谷地区が古代に続き，中世においても陶器の主要生産地であったことがわかる。</li> </ul>                                                               | <ul style="list-style-type: none"> <li>・猿投窯の生産地の広がりの中で，窯業生産が井ヶ谷地区へ伝播したことを理解する。</li> <li>・窯業生産の苦労を理解する。</li> </ul> |
| 広げる段階                                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・古代の井ヶ谷窯は，多品種で多様な陶器を焼いていたのに中世ではどうして碗と皿だけなのか。</li> <li>・完成品はどこに流通したのか。</li> <li>・なぜ山茶碗の流通は東海地方だけなのか。</li> <li>・だれが窯の経営者か。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・古代の貢納物が，中世に至り，商品としての焼き物に転換したことがわかる。</li> <li>・重原荘や他荘に流通したことがわかる。</li> <li>・川や陸路を使い，荘園の市場へ運ばれたことがわかる。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・商品経済を担う窯業製品について考えることができる。</li> <li>・荘園の商業についてまとめることができる。</li> </ul>       |
| 深める段階                                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・14 世紀を境に井ヶ谷窯の火が消えるのはなぜか？</li> </ul>                                                                                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・窯業地が瀬戸や常滑へ移ることを理解する。</li> </ul>                                                                                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ井ヶ谷窯が消滅したのか，様々な理由を考えることができる。</li> </ul>                                 |

## 5. おわりに

本稿では刈谷市域や豊田市南部地域に住む生徒を念頭に，身近な地域に埋もれていた中世井ヶ谷窯という地方窯を掘り起こし，教材化への可能性を探ってみた。しかしこれは単に西三河の一部生徒のみを対象にした試案ではない。同様な窯跡は全国に埋もれており，

採り上げることのできる時代は中世に限らない。その意味においてこの教材開発は普遍性を持っている。歴史資料である焼き物が持つ可能性を大切にしていきたい。

## 注

- (1)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』 文部科学省 2018年
- (2)塚本 学 「あとがき」『小さな歴史と大きな歴史』 吉川弘文館 1993年  
本書の中で塚本は、例えば「義民助太夫と郷土史」において、現愛知県安城市浜屋町に伝わる近世の助郷反対愁訴伝承の中に、刈谷藩領里村の枝村であった大浜茶屋村の里村からの独立を目指した動きが隠されていることを明らかにした。これにより全国各地に伝わる義民伝承の背後にある史実の一端を導き出している。
- (3)本稿では中学校社会科歴史的分野での実践を念頭に置いているが、資料等の工夫によって小学校や高等学校など発達段階に応じた学びができるものと考えている。
- (4)名古屋市教育委員会編『知っておきたい15の史実 ナゴヤ歴史探検』 ぴあ 2018年  
刈谷市教育委員会編『わたしたちの郷土 ～刈谷歴史伝～』 刈谷市教育委員会 2018年
- (5)窰(あな)窯 須恵器焼成窯として朝鮮半島から伝わった登窯の一種。トンネル状に掘り抜く地下式と溝状に掘りくぼめた後に天井を架構する半地下式がある。
- (6)愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』 愛知県 2015年  
愛知県陶磁美術館学芸課編『知られざる古代の名陶 猿投窯』 愛知県陶磁美術館 2018年等参照。
- (7)本稿では猿投窯井ヶ谷地区の古代・中世窯を「井ヶ谷窯」とし、中世に営まれた窯群を「中世井ヶ谷窯」と呼称している。
- (8)菱田哲郎はこの謎に対して、「近畿の陶邑窯や九州の牛頸窯などが九世紀から十世紀にかけて衰退、消滅するなかで猿投の系譜を引く灰釉陶器が継続し、中世窯業へとつながっていく。これには、どのような理由が隠されているのであろうか。それぞれの時期に窯業生産をめぐる社会環境に即応し、社会の需要に応じた生産が続けられるような柔軟性があつたということが一つの解であろう」と述べている。さらには「猿投のような継続的な生産地の動向を知ることは、その背後の社会の特質を見抜く手がかりとなる」とも述べている。  
菱田哲郎 「猿投の古代窯業雑感」(『愛知県史のしおり』別編窯業1 平成27年3月) 愛知県史編さん室 2015年
- (9)愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』 愛知県 2007年等参照。
- (10)愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』 愛知県 2007年  
ちなみに焼成された1枚の山茶碗が約300gとして、1窯5,000枚とすればその重さは、約1.5tの重量となり、これを牛馬が運んだとしても相当な負担が考えられる。
- (11)赤羽一郎「中世の陶器 常滑」『東海考古の旅 一東西文化の接点一』 毎日新聞社 1989年
- (12) (9)同書
- (13) 土屋武志『解釈型歴史学習のすすめ 対話を重視した社会科歴史』 梓出版社 2011年  
土屋武志編『「見方・考え方」を育てる中学歴史授業モデル』 明治図書出版 2019年
- (14)刈谷市史編さん編集委員会『刈谷市史 第一巻 原始・古代・中世』 刈谷市 1989年
- (15)「熊野旦那職譲状写 米良文書」『新編知立市史3 資料編原始・古代・中世』等 参照